瘠我慢の説

福沢先生を憶う

木村芥舟

青空文庫

左の一篇は木村芥舟翁の稿に係り、時事新報に掲載したるものなり。その文中、瘠我慢の説に関係するものあるを以て、ここに附記す。

福沢先生を憶う

木村芥舟

明治三十四年一月廿五日、予、先生を三田の邸に訪いしは、午後一時頃なり。例の通り奥の一間にて先生及び夫人と鼎坐し、寒暄の挨拶了りて先生先ず口を開き、この間、十六歳の時咸臨丸にて御供したる人来りて夕方まで咄しましたと、夫人に向われ、その名は何とか言いしと。予、夫れは留蔵ならんといえば、先生、それそれその森田留蔵……それより談、新旧の事に及ぶうち、予今朝の時事新報に出たる瘠我慢の説に対する評論についてと題する一篇に、旧幕政府の内情を詳記したるは、いずれ先生の御話に拠りたるものなるべし、先生には能くもかかる機密を御承知にて今日までも記憶せられたりといえば、先生、いや私が書生仲間には随分かようなる事に常々注意し、当時の秘密を探り出し、互に語り合いたることあり、なお洩れたる事柄も多かるべし、ただ遺憾なるは彼の脇屋某が屠腹を命ぜられたる事を聞き、かかる暴政の下に在ては何時いかなる嫌疑をうけて首を斬られんも知れずと思い、その時筐中に秘し置

たる書類は大抵焼捨ました、今日と成りては惜しき事をしましたと談次、先生遽かに坐を起て椽の方に出らる。その挙止活潑にして少しも病後疲労の体見えざれば、予、心の内に先生の健康全く旧に復したりと竊かに喜びたり。

夫人云わるるよう、この頃用便が至て近くなりまして、いつもあの通りで困りますと。やがて先生座に復され、予、近日の飲食御起居如何と問えば、先生、左右の手を両の袖のうちに入れ、御覧の通り衣はこの通り何んでも構いませぬ、食物は魚并に肉類は一切用いず、蕎麦もこの頃は止めました、粥と野菜少し許り、牛乳二合ほどつとめて呑みます、すべて営養上の嗜好はありませんと。この日、先生頗る心能げに喜色眉宇に溢れ、言語も至て明晰にして爽快なりき。

談、刻を移して、予、暇を告げて去らんとすれば、先生猶しばしと引留られしが、やがて玄関まで送り出られたるぞ、豈知らんや、これ一生の永訣ならんとは。予が辞去の後、先生例の散歩を試みられ、黄昏帰邸、初夜寝に就れんとする際発病、終に起たれず。哀哉。

嗚呼、先生は我国の聖人なり。その碩徳偉業、宇宙に炳琅として内外幾多の新聞皆口を極めて讃称し、天下の人の熟知するところ、予が喋々を要せず。予は唯一箇人として四十余年、先生との交際及び先生より受けたる親愛恩情の一斑を記し、いささか老後の思を慰め、またこれを子孫に示さんとするのみ。

予の初めて先生を知りしは安政六年、月日は忘れたり。先生が大阪より江戸に出で、鉄炮洲

の中津藩邸に住われし始めの事にして、先生は廿五歳、予は廿九歳の時なり。先生咸臨丸米行の挙ありと聞て、予が親戚医官桂川氏を介してその随行たらんことを求められしに、予はこれ幸の事なりと思い、直ちにこれを肯んじ、一見旧のごとし。

翌年正月十九日の夕、共に咸臨丸に乗組て浦賀湾を出帆したり。先生は予がこの行に伴いしを深く感謝せらるるといえども、予の先生に負うところ、かえって大にして大に謝せざるべからざるものあり。それを如何というに、この時洋中風浪暴くして、予が外に伴いたる従者は皆昏暈疲憊して、一人も起つこと能わず。先生は毫も平日と異なることなく、予が飲食起臥の末に至るまで、力を尽しこれを扶け、また彼地に上陸したる後も、通弁その他、先生に依頼して便宜を得たること頗る多ければなり。

その年閏五月五日、咸臨丸は無事に帰朝し、艦の浦賀に達するや、予が家の老僕迎に来りし時、先生老僕に向い、吾輩留守中江戸において何か珍事はなきやと。老僕額を蹙め、有り有り、大変が有りたりという。先生手を挙げて、そは姑らく説くを休めよ、我まずこれを言わん、浮浪の壮士が御老中にても暗殺せしにはあらざる歟と。老僕聞て大に驚き、過る三月三日、桜田の一条を語りければ、一船ここに至りて皆はじめて愕然たり。

予が新銭座の宅と先生の塾とは咫尺にして、先生毎日のごとく出入せられ何事も打明け談ずるうち、毎に幕政の敗頽を嘆じける。間もなく先生は幕府外国方翻訳御用出役を命ぜらる。或日、先生、役所よりの帰途、予が家に立寄り、今日俸給を受取りたりとて、一歩銀廿五両

包二個を手拭にくるみて提げ来られ、予が妻に示し、今日貰て来ました、勇気はこれに在りとて大笑せられたり。

また或時、市中より何か買物をなして帰り掛け、鉛筆を借り少時計算せらるると思ううち、アヽ面倒だ面倒だとて鉛筆を抛ち去らる。

或日、老僕、先生の家に至りしに、二三の来客ありて、座敷の真中に摺鉢に鰯のぬたを盛り、側らに貧乏徳利二ツ三ツありたりとて、大にその真率に驚き、帰りて家人に告げたることあり。

先生は白晳長身、一見して皆その偉人たるを知る。されば先生は常に袴をも着せず、一書生の風体なるにかかわらず、予が家の婢僕等皆尊敬して、呼ぶに先生を以てし、門番、先生を見れば俄かに衣を纏いてその裸体を蔽いて礼を為せり。

先生の親友に高橋順益という医師あり。至て莫逆にして管鮑啻ならず。いつも二人相伴いて予が家に来り、互に相調謔して旁人を笑わしめたり。一日、予が妻、ワーフルという菓子を焼き居たりしを先生見て、これは至極面白し、予もこの器械を借用して一ツやって見たしとのことにつき、翌日これを老僕に持たせ遣しければ、先生大に喜び、やがて自から麺粉に鶏卵を合せ焼き居られしが、高橋も来りてこれを見て居けるうち、鶏卵の加減少し度に過ぎたる故、ぱちぱちと刎出し、先生の衣服は勿論、余滴、高橋にも及びしかば、高橋例の悪口を言出せば、先生、黙って見て居れ、その代りに我れ鰻飯を汝に奢らんと。高橋その馳走をうけ、これにて少し腹が癒えたとて去りたりと。この高橋は洋学にも精通し、後来有望の人なりける

に、不幸にして世を早うせり。先生深く※惜し、厚く後事を恤まれたりという。

慶応義塾はこの頃、弟子いよいよ進み、その数すでに数百に達し、また旧日の比にあらず。或夜、神明社の辺より失火し、予が門前まで延焼せり。先生の居、同じく戒心あるにもかかわらず、数十の生徒を伴い跣足率先して池水を汲ては門前に運び出し、泥塗満身消防に尽力せらるること一霎時間、依て辛うじてその災を免れたり。その後暴人江戸市街に横行し、良家に闖入して金銭を掠るの噂ありし時も、先生頗る予が家を憂慮せられ、特に塾員に命じ、来て予が家に宿泊せしめ、昼夜警護せられたることあり。その厚意今なお寸時も忘るること能わず。

江戸開城の後、予は骸骨を乞い、しばらく先生と袂を分ち、跡を武州府中の辺に屏け居るに、先生は間断なく慰問せられたり。

明治四年八月、予再び家を東京に移すに及び、先生直ちに駕を枉られ、いわるるよう、鄙意、君が何事か不慮の災あらん時には、一臂の力を出し扶助せんと思い居りしが、かくてはその災害を待つに同くして本意に非ざれば、今より毎年寸志までの菲品を呈すべしとて、その後は盆と暮に衣物金幣、或は予が特に嗜好するところの数種を添えて※られたり。またその時予が妻に向て、今日福沢諭吉は大丸ほどの身代に成りたれば、いつにても予が宅に来て数日逗留し、意を慰め給うべしとなり。

明治十四年九月、予は従来筆記し置たる小冊を刊行し、これを菊窓偶筆と名づけ世に公にせ

んと欲し先生に示したれば、先生これを社員それ等の事に通暁せる者に命じ、印刷出板の手続きより一切費用の事まで引受られ、日ならずして予が望のごとく美なる冊子数百部を調製せしめて予に贈られたり。

同二十四年十月、予また幕末の編年史を作り、これを三十年史と名け刊行して世に問わんとせし時、誰人かに序文を乞わんと思いしが、児駿、側に在りて福沢先生の高文を得ばもっとも光栄なるべしという。然れども先生は従来他人の書に序を賜いたること更になし、今強いてこれを先生に煩さんこと然るべからずと拒んで許さざりしに、児竊かにこれを携え先生の許に至り懇願せしかば、先生速に肯諾せられ、纔か一日にして左のごとくの高序を賜わりたるは、実に予の望外なり。

木村芥舟先生は旧幕府旗下の士にして摂津守と称し時の軍艦奉行たり。すなわち我開国の後、徳川政府にて新に編製したる海軍の長官なり。

日本海軍の起源は、安政初年の頃より長崎にて阿蘭人の伝うるところにして、伝習およそ六七年、学生の伎倆も略熟したるに付き、幕議、遠洋の渡航を試んとて軍艦咸臨丸を艤装し、摂津守を総督に任じて随行には勝麟太郎（今の勝安芳）以下長崎伝習生を以てし、太平洋を絶りて北米桑港に往くことを命じ、江戸湾を解纜したるは、実に安政六年十二月なり。首尾能く彼岸に達して滞在数月、帰航の途に就き、翌年閏五月を以て日本に安着し

たり。

これぞ我大日本国の開闢以来、自国人の手を以て自国の軍艦を運転し遠く外国に渡りたる濫觴にして、この一挙以て我国の名声を海外諸国に鳴らし、自から九鼎大呂の重を成したるは、事実に争うべからず。就中、木村摂津守の名は今なお米国において記録に存し、また古老の記憶する処にして、我海軍の歴史に埋没すべからざるものなり。

当時、諭吉は旧中津藩の士族にして、夙に洋学に志し江戸に来て藩邸内に在りしが、軍艦の遠洋航海を聞き、外行の念自から禁ずる能わず。すなわち紹介を求めて軍艦奉行の邸に伺候し、従僕となりて随行せんことを懇願せしに、奉行は唯一面識の下に容易くこれを許して航海の列に加わるを得たり。航海中より彼地に至りて滞在僅々数箇月なるも、所見所聞一として新ならざるはなし。多年来西洋の書を読み理を講じて多少に得たるところのその知見も、今や始めて実物に接して、大に平生の思想齟齬するものあり、また正しく符合するものもありて、これを要するに今度の航海は、諭吉が机上の学問を実にしたるものにして、畢生の利益これより大なるはなし。而してその利益はすなわち木村軍艦奉行知遇の賜にして、終に忘るべからざるところのものなり。芥舟先生は少小より文思に富み、また経世の識あり。常に筆硯を友として老の到るを知らず。頃日脱稿の三十年史は、近時およそ三十年間、我外交の始末につき世間に伝うるところ徃々誤謬多きを憂い、先生が旧幕府の時代より身躬から耳聞目撃して筆記に存するものを、年月の前後に従い順次に編集せられたる実事談なり。

近年、著書の坊間に現わるるもの甚だ多し。その書の多き、随て誤聞謬伝もまた少なからず。殊に旧政府時代の外交は内治に関係することもっとも重大にして、我国人の記念に存すべきものもっとも多きにもかかわらず、今日すでにその事実を失うは識者の常に遺憾とするところなりしに、この書一度び世に出でてより、天下後世の史家をしてその拠るところを確実にし、自から誤りまた人を誤るの憂を免かれしむるに足るべし。

先生、諭吉に序文を命ず。諭吉は年来他人の書に序するを好まずして一切その需を謝絶するの例なれども、諭吉の先生における一身上の関係浅からずして旧恩の忘るべからざるものあり。よってその関係の大概を記して序文に代う。明治二十四年十月十六日、木村旧軍艦奉行の従僕福沢諭吉　誌

同二十六年七月、予腸窒扶斯に罹りたるとき、先生、特に駕を枉られ、枕辺にて厚く家人に看護の心得を諭され、その上、予が自から搗きたる精米あり、これは極古米にして味軽く滋養も多ければ、これを粥としまた鰹節を煮出して用れば大に裨益あればとて、即時、价を馳せて贈られたるなど、余は感泣措くこと能わず、涕涙しばしば被を沾したり。また先生の教に従いて赤十字社病院に入たる後も、先生来問ありて識るところの医官に談じ特に予が事を託せられたるを以て、一方ならず便宜を得たり。数旬を経て病癒て退院せんとする時、その諸費を払わんとせしに院吏いう、君の諸入費は悉皆福沢氏より払い渡されたれば、もはやその事に及ば

ずとなり。

後また数旬を経て、先生予を箱根に伴い霊泉に浴して痾を養わしめんとの事にて、すなわち先生一家子女と共に老妻諸共、湯本の福住に寓すること凡三旬、先生に陪して或は古墳旧刹を探り、また山を攀じ川を渉り、世の塵紛を忘れて神洞仙窟に遊ぶがごとく、大に体力の重量を増すに至れり。嗚呼、先生何ぞ予を愛するの深くして切なるや。予何の果報ありて、かかる先生の厚遇を辱うして老境を慰めたりや。要するに、予の半生将死の気力を蘇し、やや快くその光陰を送り、今なお残喘を延べ得たるは、真に先生の賜というべし。

以上記するところは、皆予が一身一箇の事にして、他人にこれを示すべきものにあらず。またこれを記すとも、予が禿筆、その山よりも高く海よりも深き万分の一ツをもいい尽すこと能わず。またせめては先生の生前において、予がいかにこの感泣すべきこの感謝すべき熱心と、いかにこの欣戴し惜かざる衷情とを具さに言いも出ずして今日に至りたるは、先生これを何とか思われんなどと、一念ここに及ぶ毎に、胸裂け腸砕けて、真に悔恨已む能わざるなり。

青空文庫情報

底本：「明治十年丁丑公論・瘠我慢の説」講談社学術文庫、講談社
1985（昭和60）年3月10日第1刷発行
1998（平成10）年2月20日第10刷発行
底本の親本：「明治十年丁丑公論・瘠我慢の説」時事新報社
1901（明治34）年5月2日発行
※緒言は石河幹明によるものです。
※誤り箇所は底本の親本にて確認しました。
※旧字の「竊」は、底本のママとしました。
入力：kazuishi
校正：田中哲郎
2006年11月7日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

瘠我慢の説

福沢先生を憶う

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　木村芥舟
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/